

ディベート教育と会計学教育

齊藤久美子

I. はじめに

一般に会計学教育においてディベートが用いられることは皆無ではないが、そんなに多くはない。例えば、県立広島大学では「負債は企業価値にとってプラスの効果が高いのか、マイナスの効果が高いのか」というテーマでディベートを行った実績を公表している¹⁾。

筆者はここ十数年、会計学教育、特にゼミナールにおいてディベートを積極的に採用している²⁾。そしてそれはかなりの程度、成果を上げている。具体的には学生の主体的な学習、その口頭での発表、そして、疑問へのさらなる探求である。

II. ディベートとは何か

具体的なディベートとは何かということについては拙稿「ディベートの社会科学教育・会計学教育への応用」を参照されたい³⁾。ここでは、松本道弘氏の提唱する六角ディベート（サッカー・ディベート）を応用している。そもそも六角ディベートは「サッカー・ディベート」と呼ばれ一つの問題（ボールに例えられる）を一組5人（最低4人）で対抗して討論（闘論）するものであった。しかし、「サッカー・ディベート」はスポーツのサッカーと誤解されることがあり、最近では「六角ディベート」と呼ばれるようになった。ディベートとは心理の追求であり、「朝まで生テレビ」に代表されるような言い合いではない。繰り返しになるので、先に挙げた拙稿を参照されたい。

しかしながら、各役割についてここで再度確認しておきたい。

○ディベートにおける役割

石…(原則的論理) 立論を述べるディベーター。肯定側は現状打破の議論を構築し、否定側は

1) <https://www.pu-hiroshima.ac.jp/site/management/news270121-2.html>, 2019年9月1日閲覧。

2) 齊藤久美子『会計学とディベート—教育と研究の接点を求めて—』三恵社, 2006年。

3) 齊藤久美子「ディベートの社会科学教育・会計学教育への応用」『経済理論』第392号, 2018年3月。

ここでは、次の書物をもとにした。松本道弘『ディベートの原理・原則』総合法令出版, 1992年, 松本道弘『六角ロジック』講談社, 1994年, 松本道弘『ディベートには守・破・離がある』経済界, 1994年, 松本道弘『共生時代のディベート道』明治図書出版, 1995年。

現状維持の議論を構築する。石のように硬く、論理的な論拠を、説得力を持たせて主張する必要がある。石のディベーターが述べた主張はチームをあげて守るべきものとなる。論拠の論理性・客観性・重要性はもとより、相手側からの質問に対して堅固にするよう注意する必要がある。

風…(状況的論理) 反対尋問を行うディベーター。相手側の論拠を素早く分析し、軽快に論理の欠点を指摘する。いかにして相手側の論拠の欠陥を明らかにし、自分達の論拠の正当性を認めさせるかがポイントとなる。また1つの議論に固執することなく全体に渡って質問を投げ掛け、六角ディベートでの攻撃材料を充実させることも重要な役割である。

火…(自愛的論理) 第一反駁を行うディベーター。これまでの議論を受けて、自身の体験を交えながら烈火の如く相手側の論拠を攻撃する。どれだけ聴衆の気持ちを引き込めるかが重要になってくる。但し、あくまで反駁を行うだけなので、自身の主張に傾倒するあまり熱くなり過ぎて、これまでの議論から逸脱し、議論を新たに提起するようなことになってはいけない。

水…(他愛的論理) 第二反駁を行うディベーター。火とは対照的に、相手側の論拠に配慮を示しつつも最後の主張を行う。相手の議論を認めつつ、自分の立論やその論拠の正しさを訴えかける必要がある。

空…(石風火水のチーフ) 各担当者が発言に困った際に議論に参加して、彼らを補助するディベーター。他のメンバーが発言している時に割り込んで、適切な補助を行うことも役割の1つである。しかしながら、必ずしも助けに入ることが評価されるわけではなく、かえって各役割の評価をおとしめたり、不必要に意見を加えて議論を混乱させたりして、自分達に不利に働く場合がある。

○六角ディベートの各役割のジャッジ基準

六角ディベートにおいては、『審査員の判定基準』だけではなく、各役割独特の視点からのジャッジが必要となる。それを以下に示す。しかし、これが全てを網羅しているのではなく、一般的なディベートの判定基準も考慮したうえでの基準であることに注意しなければならない。

石…論理の流れ、つまり、立論が三角ロジックとして成立していたか。また、反対尋問に対して自分達の意見を崩さず論理的に対応できたか。

風…議論の確信に迫る質問ができたか、あとのディベートにつながる質問ができたか。

火…個人的な体験に基づいて、いかに熱っぽく相手に語りかけられたか。また議論を受けて、自分の意見を再構築でき、発言できたか。

水…これまでに出了議論から相手の主張に共感しつつも、自分達の主張の正しさを相手に共感させることができたか。

空…自らの立論をスムーズに展開させるために、石・風・火・水の助けがしっかりできたか。
また作戦タイム時のチームの意思統一を行えたか。

○六角ディベートと他のディベートの違い

六角ディベートも他のディベートも、『立論→反対尋問→反駁』という基本的な流れは変わらない。また、ディベートの定義の①厳密なルールがあること②フォーマルな議論であること③判定団という第3者が討論の善し悪しを科学的に判断すること、という3つの特徴は六角ディベートにも当てはまる。しかし、六角ディベートには3つの大きな特徴があるように思われる。

第1の特徴は、三角ロジックや六角ロジックといった概念を用いて、ディベートの中で最も抽象的である『科学的』という言葉であったり、『論理的』といった言葉を視覚的に捉えやすくしている点にある。石・風・火・水・空という異なる役割を演じることによって、ディベーターは自分のすべきことが明確になり、その役割に適した能力を習得しやすくなるのである。

第2の特徴は、当初、サッカー・ディベートと言っていたようにチーム戦というところである。各人の役割分担しているため、メンバー同士の準備段階、作戦タイムでのコミュニケーション、意見の統一が大事になってくる。

第3の特徴は、バイリンガル・ルールや六角ディベートという全員参加型のステージを設けることで、非常にスピーディーに、リズムにのって議論が展開されるという点である。これにより、ディベーターは用意された台本に則ってディベートを進めるだけではなく、常に状況判断をせまられ、柔軟な思考を生み出すきっかけになる。

Ⅲ. 具体的なディベートへの応用

ここで、学生によるディベートの例を挙げてみたい。筆者が指導するゼミナールでのディベートを文字起こししたものである。なお、ゼミナールでは日本語のみで行っている。また、本ディベートは令和元年7月4日に和歌山大学経済学部齊藤久美子ゼミナールで行われたものである。

司会

それでは、ただいまより「我が国は時価主義会計を廃止すべきである」という論題に対してサッカーディベートを行います。それではまず、肯定側の第一立論からお願いします。

肯定側 石

私たちのグループの立論として、三つあります。一つ目は時価主義会計のデメリットである時価の判断が適正ではない場合があるということ、二つ目がもう一つのデメリットである未実現利益を計上してしまうこと、三つ目が取得原価主義会計のメリットである検証可能性があるということです。

一つ目の時価の判断が適正ではない場合があるということは、自分で時価を決められてしまうこと

であるということで、価値の流動がないつまり金融商品でないものときは、どこから時価を判断すればよいかということが分かりにくいことがあります。

時価を操作することができてしまうということがこの二つからわかると思います。ということは公正な資産評価ができないということになり、その財務諸表は客観的ではなくなってしまうと考えます。

二つ目の未実現利益が計上されてしまうということについては、余分な費用を社外に流失してしまうということにつながります。収益として出た分が配当として社外に流失してしまったり、税金も利益の分だけ出てしまったりするのでその分費用がかさんでしまうということがあります。また、含み損益を計上してしまうということは会計処理が複雑になってしまうということもあり、含み損益を計上するとそれがさらなる不安をよんで急に倒産することもあります。

取得原価主義会計はそれをしなくてよいので、実務的に明確で統一性があり実効可能性があるといえます。

三つ目の検証可能性があるということについては、実際に取引のあったものが帳簿に記入されるからレシートとか領収書というものがあって、時価がどんなに変動してもこっちの評価額は一切変動しません。そのため一年ごとに比較したりできる比較可能性があるといえます。会計記録が検証可能な証拠資料に基づいていることが企業会計原則の正規の簿記の原則でもあったと思うのですが、それによって客観的な測定や証明が可能になります。

タイムキーパー

終了です。

司会

それでは続いて否定側からの反対尋問をお願いします。

否定側 風

第一の立論の時価が公正ではないという立論についてですが、時価というのは企業会計原則において貸借対照表に記載される資産の価格は原則として当該資産の取得原価を基礎として計上されなければならないと定められていて、市場価格での時価であれば客観性がないというのはいえないと思うのですがどうですか。

肯定側 石

市場価格とはなんですか？

否定側 風

市場価格というのは不特定多数の人の目によって決定されるので力関係などによって適正ではない価格になることがないでしょうか。

肯定側 石

市場価格だけで考えるものではないかなと思います。例として、森友学園を調べたんですけど、もともと時価が約9億だと判断されていましたが、ほかの視点で見て、色々差し引いたら1億円で取引されてしまったということがあるので、あまり市場価格だけで判断するべきではないかと。

否定側 風

客観的に判断できない時価については、取得原価で処理するというようになっているのでその点はどうか。

否定側 空

非上場株式などの市場にのっていない株式とか金融商品などについては、取得原価において評価するのですが、時価で判断できるものについては時価で判断するとなると、「これはできる」と言い張ったら利益をかさましてできると思います。逆に「これはできない」と言い張ったら、はたから見ただけのものではないかというものも利益に含まれないと思うので、そういうところで利益操作になると思います。客観性というのもそのときそのときだけでなく一年後にこれは本当にこの時価であったのかということをその時の客観性だけで見るのは危ないと思います。

タイムキーパー

終了です。

司会

それでは否定側の第二立論をお願いします。

否定側 立論

我々は時価主義会計がなぜ必要なのか、その理由を整理しそのことから理論を否定することを主張します。

一つ目にまず時価主義会計を採用することで、投資家に対して正確な情報を提供できるというメリットがあります。取得原価主義会計では資産の価値の変動を細かく記録することができないため現在の価値を把握することができません。そのため、投資家のみならず経営者にとっても正確な情報をつかめないリスクがあります。それに対して時価主義会計は現在の価値であり時価で資産を再評価するため、貸借対照表上に含み損益が反映され現在の企業の正確な財政状態を把握することができます。このため投資家もより正確な意思決定の判断になると思います。

二つ目にこれからの時代グローバル化に対応できる必要があるともいえます。国際会計基準 IFRS は時価主義会計を柱としていて、現在 EU 諸国・カナダやオーストラリアなどで適応されています。IFRS の導入は比較可能性の向上、業績の適切な反映、また海外進出の際などに資金の調達源となる海外投資家への説明の容易さにつながります。海外投資家が日本の市場に占めている割合は 6 割といわれており、海外との取引を度外視するわけにはいきません。よってこれからのグローバル化の時代において日本の企業は IFRS に合意せざるをえないでしょう。

三つ目に時価主義会計を廃止するとデリバティブ取引の停滞を招くこととなります。デリバティブとは金融派生商品のことで主なものに先物取引、オプション取引があります。いずれも現時点で契約をし、実際に商品を購入する際に価格が変動していても契約時の価格で売買が行われるものです。我が国はデリバティブ取引で決済時に発生した評価損益を財務諸表に計上していることから、時価主義の廃止は近年多様化してきているデリバティブ商品において含み損益を発生してしまい望ましくないといえるでしょう。

以上の三つの立論で、我々は時価主義会計を廃止すべきを否定します。以上です。

司会

では、肯定側の反対尋問をお願いします。

肯定側 風

はい、立論の1つ目で取り上げられていたのですが、含み損益が反映されるということで、それはいいと言っていたと思います。しかし、含み損が反映されることで、そのさらなる評価損により経営が不安定になるのではないですか？

否定側 石

現時点での財政状態を把握できるからいいのではないのでしょうか。

肯定側 風

では次の質問に移させていただきます。2つ目の立論でIFRSを導入するのに役立つとされていたんですが、日本の中小企業率というのが99.7%で、そこで働く人は70%なんです。海外と比較しても中小企業率っていうのが高い数字となっているんですが、IFRSを導入することで、新たにかかる人件費とかを考慮した場合、ちょっと今の日本にそういう余裕はないんじゃないかと思うんですけど、どうですか？

否定側 石

いずれ適用されるので、どっちみち…

否定側 空

失礼します。上場企業に対してのIFRSの導入はよくて、中小企業に対しては別にIFRSを適用するっていうものではなくて、いずれ国際化の競争力の中でのIFRSの適用が必要になってきていて、また、中小企業の海外投資家の割合が約6割くらいあるために、IFRSを見てからの、海外投資家にわかりやすく説明できるようにするために必要なのではないかと、と思います。

肯定側 風

それと関連した質問になるんですが、海外投資家のためには、IFRSを導入するっていう話は分かるんですが、そのIFRSを導入する際に大事となるのが、資金面と法改正が必要になるのではないかと思います。

否定側 石

そうですね。

否定側 水

では付け加えて資金面とかが必要だと思いますけど、IFRSを適用するっていうのは、基本的に上場企業になるので、資金面に関しては、中小企業や零細企業でない限りはある程度は見越して適用できるのではないかと思います。

肯定側 石

ありがとうございます。

タイムキーパー

終了です。

司会

それでは続いて作戦会議に移ります。

司会

続いて六角ディベートに移ります。前半は否定側の攻撃からお願いします。

否定側 空

先ほど言った森友学園の例を出されたと思うんですけど、森友学園の例っていうのは、結局先に1対1じゃないかもしれないですけど、価格を決めたうえで、他の誰かが後から価格を見直したらそれが間違ってたっていう話であって、最初に決められた価格っていうのは公正じゃないっていったように、確かに公正じゃない。これは1対1の価格の話であって、時価とは言えないんじゃないかなと。それで後から言った適正な価格を出したのは、他の人たちが言われてた時価の価格として適正な価格であったために、結局最初に決められた価格は相対的価格であって、公正な時価ということではないんじゃないかと思うんですけど。

肯定側 石

森友学園の問題っていうのは、まず、土地調査会っていうところが出した金額が森友学園の土地は9億円程度だったんですけど、国有地なんで、近畿財務局が森友学園に売った価格は1億3400万円、そこからさらに汚染土が見つかったりとか、ごみが埋まったりっていうのがあって助成金が1億3200万円出て、実質200万円で買ったっていう問題なんです。

これの何が問題になったかっていうと、これが企業と企業とか、個人と個人だったら問題になってないと思うんです。しかし、国有地なんで、日本みんなのものなんで、問題になったんですけど、やっぱり時価かどうか分からないじゃないですか。

結局、1億3400万っていうのが適正な価格だったかどうかっていうのは、第三者が正しかったのか間違ってたのかっていうのは、適正じゃない可能性があると思うんで、やっぱり時価の判断は客観性とか確実性のないものだと思います。

肯定側 空

1億3000万っていうのが、森友学園の問題になった一番最初の発端の金額なんですよ。そのあとに、僕が一番最初に言ったところが、価格の訂正をした。これだけ実はあったっていう話であつたじゃないですか。結局その最初の価格で取引が行われて、その後に違う機関が調べた結果、実際にはいくらの不利益があったっていうのが問題であって、その最初に取り決めた価格っていうのは、時価ではなくて、市場価格やほかの第三者から入ったのが適正な価格でいわゆる時価であって、最初に決めた時価っていうのと第三者から見た時価っていうのは違う時価なんじゃないかなと思うんですけど。

肯定側 風

最初に森友学園が土地を買いだいたいってなった時に、土地調査会が言ったのがその価格であって、それで結局売ったのがこの値段でしたっていう問題なんで、後から見た金額がこんだけでした、っていうのは違うと思います。

タイムキーパー

終了です。

司会

続いて、肯定側の攻撃をお願いします。

肯定側 風

デリバティブの問題になるんですけども、2008年にアメリカで起こったリーマンショックにつながる問題があります。サブプライムローン問題っていうのがあって、どういう問題かっていうと、低所得者向けのローンなんですけど、それを絡めた金融商品、デリバティブ商品とかを全世界に向けて取引していたから、リーマンショックっていうのはアメリカだけにとどまらず全世界に広まってしまうことになったんです。やっぱり時価で判断していると、急に価格が下がることもあって、損することもあるじゃないですか。そういう危険性についてはどう思いますか。

否定側 空

確認なんですけど、リーマンショックの会社で起こったものは、デリバティブで行われてたんです。逆にさっき言ったようなオプション取引っていうのがあるんですけど、仮にその会社がオプション取引っていうのをやっていれば、オプション取引っていうのは契約時点で権利を買うことができるんですよ。それで実際に売買が行われるときに、拒否するっていう権利を持っているわけであって、このオプション選択を例えばデリバティブでやってたというなら、リーマンショックの問題っていうのはないと思うんですけど。

肯定側 風

サブプライムローン問題っていうのが、低所得者向けのローンなんですけど、その債権を取引してた問題なんで、オプション取引で債権を売り買いするっていうところにも問題があるんじゃないかなと思います。

肯定側 風

別の質問にいきます。

肯定側 水

こっちから言ったことで、数字を時価で判断したら客観性がないんじゃないかっていうことなんですけど、客観性がないことによって利益操作をすることが可能になるんじゃないかと思うんですけどどうですか？ 利益を少なく見せたり、時価の判断を勝手に経営者が判断するようなものと利益操作が可能になるんじゃないかなと思うんですけど。

否定側 空

利益操作はどちらかという取得原価の方がしやすいと思うんですけど。それはどう思いますか。

肯定側 火

しやすいしにくいとかではなくて、時価主義会計でも実際カネボウの例で、減損会計を利用した利益操作っていうのが起こってるんですけど、それについてはどう思いますか。

否定側 空

ごめんなさい、カネボウの問題についてはちょっとわからないです。

肯定側 火

グループ会社で損失が大きい株を形だけ取引先に譲渡した、っていう形で連結から外して、帳簿上に見えないようにしたっていうのがあるんですけど、そういうこともできるんですけど。

タイムキーパー

終了です。

司会

終わってください。それでは作戦会議に入ってください。

司会

それでは否定側の火の人、第一反駁に入ってください。

否定側 火

二つ目の立論に関連してグローバル化が進み EU 諸国に加えてカナダやオーストラリアなどの国で国際会計基準が採用されている中、国際会計基準に対応している時価主義会計を金融商品に適用しない場合、日本の財務諸表と他国の財務諸表との比較可能性が失われるというデメリットに関して体験談を話したいと思います。

僕は大学受験に失敗して大学受験の予備校に通っています。なので予備校選びの話をしたと思います。

浪人するにあたって和歌山市には浪人生が通う予備校が四か所ありました。予備校の先生に教えてもらうことがすべてではありませんが、できるだけよさそうな予備校に行きたかったのでとりあえず全部の予備校を回ってパンフレットをもらって決めることにしました。

その際に一番初めに自分の候補から外した予備校があってそれがほかの予備校とは異なって過去の情報を提供する予備校でした。ほかの三つの予備校では最新の時価評価された今年度の予備校生の合格実績を提供してくれましたが、この一番初めに自分の候補から外した予備校は、二年前には京都大学に合格していますとか、三年前は東京大学に合格しているという情報を提供する予備校で、他の三つの予備校が発信している今年度の最新の時価評価された合格実績と比較することが出来なかったののでやめました。

やっぱり人が複数のものの中からものを選んで決めるときは比較して選ぶのが一般的だと思います。

海外投資家も人であると思うのでどの企業が一番良い企業であるのか比較して決めると思います。その際にはほかの企業の財務諸表と比較することが出来ないからという理由で海外の投資家から資金調達するチャンスを逃してしまうのは甚だ損だと思います。よって多くの国が採用している多数派の金融商品に対する時価主義会計を継続すべきであると考えます。

また、時価評価をしていなかったがために失敗したものとして飼い犬との信頼関係があります。名前はひなと言います。最近運動不足の解消として、ひなを引き連れて走ることにしました。小学生の飼いだ始めたときは散歩が好きでどれだけ散歩をしても喜んでくれましたが、ひなも年を取って体力が落ちてきたみたいで苦しそうにしていました。それで次の日に散歩に行こうとすると嫌がられました。原因は前日に今の時点での評価をしてあげずに連れまわしたことだと思うので、ちゃんと時価評価することは大切だと思います。

タイムキーパー

17秒残っていますが終了でいいですか。

否定側 火

終了です。

タイムキーパー

はい。

司会

それでは肯定側の火の人、第一反駁をしてください。

肯定側 火

僕は石で主張した検証可能性があるということを帳簿を使って説明していきたいと思います。

サークルの帳簿なんですけど、僕が書いているこういったものがあるんですけど領収書とかを別で分かりやすくまとめています。帳簿書くのは初めてでどうやっていいかわからなかったんです。でも、去年の帳簿があるんですけど、これを全然関係ない僕が見てもすごくわかりやすかったんですよ。これで客観性があるということがもうわかると思うんですけど、今見せた領収書と合わせると検証可能性が大いにあると思うんです。

実際にこの帳簿を合宿とかでサークルの人全員に見てもらってちゃんと把握してもらおうようにしてるんですけど、それも客観性、検証可能性がないと成り立たないと思うのでこれで取得原価主義の検証可能性があるということが分かってもらえると思います。そしてもう一つ比較可能性についてなんですけど、去年のやつと今年のやつを比較して同じようなつけ方をしているのでも比べて無駄なところはないか。不正はしないと思うんですけどサークルなんで、不正している変な支出はないか、そういうのがだれの目にも明らかになるようになっていきます。

比較できることのもう一つの利点なんですけど、来期の収支案というのがとても立てやすくなってらるんですね。実際、サークルの存続届にも来期の支出案を書かないといけないんですけど、去年のやつを見て僕も計算してやりました。

去年からちょっと離れた3年前のやつもここにあるんですけど3年前のやつと今年のやつを比べて

実際に今サークルの費用状況がどうなっているか、どう変わっていつているかが一目見て分かるようになっていきます。

ここで出している例はサークルの例なんですけどこれは企業においても比較可能性、自分の企業に関して毎年度比較できるということはとても大きいと思うので時価主義会計より取得原価主義会計を採用したほうが企業ごとにも自分たちの状況がしっかりと把握できることが優れていると思うので、時価主義会計より取得原価主義会計を推したいと思います。以上です。

タイムキーパー

終了です。

司会

それでは否定側の水の人、第二反駁に入ってください。

否定側 水

先ほど火の方の意見でサークルの帳簿が出てきたと思うんですけど、僕の所属する部活にも会計という役職があって、そこでも同じように領収書やレシートで実際に帳簿をつけて、毎年引き継ぎのものといろんな人がやっています。正直僕からしても実際の役職同士の人で話し合ったりと引継ぎがあつて、ほかの人は細部まで見ないと思うんですけど、その細部で不正があるかもしれないと思うんですけど、その点はどう思われますか。

司会

水の人は質問じゃなくて相手の意見を受け入れつつ主張するので、質問はしないでください。

否定側 水

その不正がある件なんですけど、僕は会計には務めていないので会計がどのような仕事をしているのか分からないんですけど、ほかの部員からしても細かなところに不正があるかはわからないと思うのが一つと、二つ目に、一年一年で帳簿は変わっていくと思うんですけど、大きな十年前や二十年前、もっと前の帳簿と比べても一緒のものを使っていたとしても、物価などが変わってきていてそれを比較するには時価で評価の方が妥当だと思います。また、インフレのような世界的にも大きな波が来た時に、去年とは異なって評価しないといけなときは取得原価でなくしっかりと時価で評価すべきだと思います。

司会

それでは肯定側の水の人、第二反駁に入ってください。

肯定側 水

石の方が言ったように、時価主義会計は含み損益を反映することによって企業の正確な財政状態がわかるので、これはとても投資家にとって利益があることだと思います。企業の債務返済能力もわかるため、リスク管理も行いやすくなります。

しかしこの利益は短期的に見たときのものであって長期的にみると、こうではないと思います。含

み損益を反映しないということは未実現利益を計上しないということなので社外に税金や配当として不必要なお金が行くことが無くなります。このお金が行くことによって企業の経営を圧迫して倒産につながる恐れがあります。また、含み損を反映するということは、投資家の不安をあとより更なる含み損をよんでしまうことになり、これも企業の倒産につながるのだと考えられます。

この長期的にみて利益があるということは企業が倒産しない、将来的に安定的に成長していくことが企業にとっても投資家にとって利益だと思うので、含み損益は反映されない方がいいのではないかと思います。

含み損益を反映しないことによって利益操作ができるということをさきほども少し話が出たのですが、確かに含み損を隠すという点では取得原価主義でもできるのです。しかしこれは時価主義会計でも時価が公正でない場合利益操作ができます。どちらも利益操作ができる場合、より客観的で信頼性のある数字を用いた方がいいのではないかと思います。時価の主観的な数字を用いた財務諸表よりも、確実に信頼性のある数字を用いた財務諸表のほうが良いので、取得原価主義を用いた方がいいと考えます。

司会

それでは判定に入ります。

司会

では石のジャッジの人判定をしてください。

ジャッジ

まず石は立論が固まっているかと反対意見に対しての答えと時間と紙見てるかについての観点で判定しました。立論固まっているかと時間と紙に関してはどちらも同じくらいに思えたので、反対意見に対してなんですけど、否定側の方が反対意見に対して「そうですね」と受け入れてしまっているとこがあったので肯定側に点を入れます。

司会

次に風のジャッジをお願いします。

ジャッジ

はい。風のジャッジの観点としては、まず質問回数と、次に質問が「はい」か「いいえ」か、簡潔にこたえられるようなものになっているかっていうのと、相手の立論を揺るがすことができていうか、という3つで判断させていただきました。初めの質問回数に関してなんですけれども、両者とも質問回数に関しては数えてる限りだと一緒だったのでここは判定しづらいかなと。次の「はい」か「いいえ」かでこたえられるかということに関しても両者ともに質問が説明口調になってしまっていてどうしても長くなってしまっているということと、「はい」か「いいえ」かでこたえにくい質問になっているっていうのがあったのでここも判定が難しいなっていうところなんです。でも最後の立論を揺るがせているかっていう点で、肯定側の質問に対して否定側の石の方が一回納得しちゃったかなみたいなのがあったので、この点でなんとか肯定側の風に票が入るかなっていう感じで、全体的には一応肯定側に風は入れようかなと考えます。以上です。

司会

次に火のジャッジをお願いします。

ジャッジ

皆さんお疲れ様でした。評価基準としましては、まず一番重きにおいているのは相手にどれだけ語り掛けているかというので、それについてなんですけど原稿を見ているかどうかというのと、後は話した時間がどれだけだったかということで判断させていただきました。実際に両方とも実体験に基づいて話してもらったと思うんですけど、やっぱり相手にどれだけ語り掛けているかという観点からすると、肯定側はしっかり相手のほうを見て、帳簿とかも表示して語れていたかなと思います。否定側はどちらかというと淡々と、それに付随してなんですけど原稿も多くの時間見ていたかなと感じています。時間も肯定側はびったりだったのに対して、否定側は17秒ほど余ったということなんで、これを合わせてみたところ火は肯定側にあげたいと思います。

司会

次に水のジャッジをお願いします。

ジャッジ

皆さんお疲れ様でした。水のジャッジとしては、相手の意見を受け入れて自分の意見を述べていたかと、時間に関してみました。水なんですけど、否定のほうが自分の役割をちゃんと理解していなかったのと、肯定側は自分の意見を述べて、初めに相手の意見を受け入れていたので、水は肯定側を勝ちとします。

司会

次に、空と六角ディベートのジャッジをお願いします。

ジャッジ

空に関して、内容も全然違ったんで分けて判断させていただきます。

空に関しては、議論が活性化できているかっていうことと、他の役割が詰まった時に手助けができているかっていう部分で、どちらもかなり拮抗していたんですけど、否定派の方がかなり簡潔に述べられていたっていうのと、あとは躊躇なく手助けに入れていた、逆に議論が活性化したときにはしっかり受けていたっていうので、空に関しては否定派に入れさせていただきます。

六角ディベートに関しましては、質問の数と人数と相手の論拠をいかに攻めれていたかっていうので、質問の数は圧倒的に肯定派の方が多く、人数に関しても肯定派は3人に対して否定派は1人だったこと、攻め方に関しては、お互いに難しい話も入ってたんですけど、議論は拮抗していたので、総合的にみて空も併せて肯定派の勝ちとさせていただきます。

司会

以上で、5-0で肯定側の勝ちとします。

Ⅳ. まとめ

以上が、学生によるディベートであった。わずか2か月程度の学習でディベートの習得、特に六角ディベートについては完全ではないものの、よく習得できていることがわかる。また、会計学的な内容についても踏み込んで自ら学習し、活用することができるようになっている。

次に学生によるディベートの考察、反省を少し、紹介しておきたい。

ディベートをする際は、相手のこともしっかりと調べるべきだとわかった。否定派の石で出てきたデリバティブ取引やIFRSについての知識がなく、その欠点や利点がわからなかったためだ。相手の立場に立ち、一度調べるべきだと思った。この立論を理解することができないと、六角ディベートで質問することができず、また水を述べる際にも受け入れることが困難であるためだ。石はしっかりと発言できるが、風からの質問によって揺らぎやすいため、どのような質問が来るかの推測をあらかじめすべきであることがわかった。

風は質問を短く簡潔に行う方がテンポよく進むので、その場で考えるのではなくこれも用意が必要である。質問数を増やすためにも、はい、いいえで答えることができる質問にするべきだと思った。

六角ディベートは、遠慮しあって話し出すのが遅れてしまったので、もっと積極的に個人個人が話し合いに参加しなければならないと思った。六角ディベートも、はい、いいえで答えることのできる質問にすることで相手の立論を揺るがすことができ、また自分が不利になることがないため、風のようには用意していくべきだと分かった。

一つの話題だとしても、複数人で答えることにより、より詳しい回答をすることができ、追い詰められず冷静に進めることができるのではないかと思った。カネボウの例を出した際、否定派がその事例を知らなくて困ったため、六角ディベートでは、企業などの規模の小さな事例は出さない方がよいのではないかと思った。火では、作成した資料を読むのではなく、覚えて情熱的に訴えかけることが大切であり、このディベートの中で独立した役職だと思った。空からの手助けを受けることも難しく、事前用意が必要だ。水は臨機応変に対応することも必要だと思った。自分は水で原稿を用意したが、相手が利益操作のことについて触れてくれず困ることとなった。

六角ディベートで利益操作の話を出したが、不自然な話の持っていく方になってしまった。原稿を一つでなく、いくつかのパターンを作成すべきだった。また、風の人とも連携して、利益操作について質問してもらうべきだったと思う。また、残り三十秒になると焦ってしまい早口になってしまった。結果、時間が少し余ってしまった。ペースを変えずに話すことができたなら、三分ちょうどで終わったのではないかと思う。

空は積極的にディベートが止まった際は参加していたので、私になった際はこれを参考にしようと思った。総合的には、もっとお互いの役職で何を言うのか共有すべきだった。どの役職も石としか情報共有をしていなかったため、共有不足だと感じた。次回のディベートでは、相手の主張もしっかり調べ、情報共有も詳細にしていこうと考えた。

この考察はディベートの本質をしっかりと踏まえ、自他ともに成長していることがわかる。次に、別の学生の考察を紹介する。

石における判定として、立論が固まっているか、反対意見に対しての答え、時間と紙を見ているかの点から総合的に判定が行われた。石においては、否定派が反対意見に対しての対応が相手の主張を受け入れてしまったことから、肯定派側に軍配があがった。

風における判定として、質問回数、質問が簡潔に答えられるものとなっているか、あいての立論を揺らがすことができているかの点から総合的に判定が行われた。風においては、肯定派の質問に対して、否定派が肯定派の意見に納得した点があり、肯定派側に軍配があがった。

火における判定として、相手にどれくらい語れているか、原稿を見ているか、発表時間は適切であるかという点から総合的に判定が行われた。火においては、特に肯定派がしっかりと相手をみて語れていたため、肯定派側に軍配があがった。

水における判定として、相手の意見を受け入れて自分の立論が述べていたか、発表時間の点から総合的に判定が行われた。水においては、否定派が自身役割を理解していなかったのとは対称に、肯定派はしっかりと相手を受け入れつつ、自分の立論を補佐していたため、肯定派側に軍配があがった。

空・六角ディベートにおける判定として、空は議論が活性化されているか、他の役割が詰まった時に補佐できているか、六角ディベートは質問回数、議論参加人数、相手の論拠をいかに攻めていったかの点から総合的に判定が行われた。空においては拮抗していたが、六角ディベートにおいて参加人数が肯定派の方が多かったため、肯定派側に軍配があがった。

今回の六角ディベートに関して、時価主義会計と取得原価主義会計について調査し理解が深まった。立論においては、きちんと立てられていたが、サッカー・ディベートに対する理解が浅はかであった。相手に質問する際に、簡潔かつ疑問を投げかけない、相手の主張に納得しないなど内容より形式の部分で問題がみられた。次回の六角ディベートまでに修正し、内容もより濃くなるようなものにしていきたい。

この学生の考察もディベートの本質をとらえ、会計学の内容にも深く入り込んでいる。

以上が、会計学教育においてディベートをどのように用いたかの実例の紹介、考察である。ディベートにおいて技術習得はもちろん、会計学の研究内容にも深く入り込んでいる。また、同じ論題でも、時期が変わると社会も変化し、今回は森友学園問題も例に出している。学生の会計学の学習はもちろん、多方面への自主学習、そしてプレゼンテーション能力の啓発のために、成功していると思われる。具体的には次のように整理される。

- ①ディベートを用いること、肯定、否定の両方を経験することによって論題が客観化される。
- ②ディベートをここでは会計学を対象としているが、あらゆることに適用可能である。就職活動における集団面接においても堂々と、他の人を尊重しつつ、論ずることができる。
- ③社会に出てからも、上記②の利点を用いながら応用できる。
- ④社会は刻々と変化している。それをオンタイムで捉えながら、ディベート、会計学学習に活用していける。
- ⑤従来のディベートとは異なり5人対5人を基本に行うため、ディベートの哲学を一貫することが必要になる。そのため、チームワーク、共同作業の能力も捉える。

今後はディベートによる会計学研究, 会計学教育を継続しつつ, 学生自身も指摘している問題を明確化しながら, 改善していきたい。

付記:

- 1) 本稿におけるディベートの文字起こしについては平成 31 年度 (令和元年度) 齊藤久美子ゼミナールの学生の協力によった。それを筆者が加筆修正したものである。また, 個人名は特定できないように, 筆者のほうで役割に書き換えた。また, 学生による考察についても同じである。
- 2) 本稿は平成 31 年度 (令和元年度) 和歌山大学経済学部「ディベート教育研究ユニット」による研究成果の一部である。

Hexagonal Debate and Accounting Education

Kumiko SAITO

Abstract

Debate, especially Hexagonal Debate, is very useful for university education, particularly for accounting subjects. Hexagonal Debate was originally proposed by Matsumoto Michihiro. This paper describes its educational function among university students in 2019. By conducting a Hexagonal Debate in the author's seminar, the students further developed not only their accounting competencies but also their abilities to actively participate in discussions.